

御殿山第二砲台



別名「臥牛山」は函館のシンボル

かつての御殿山第二砲台の28cm榴弾砲 (大正11年)



薬師山砲台



戦闘司令所 (千畳敷)

私と遺産

街全体を世界遺産に

船大工の技術や造船道具、戸井町のアーチ橋などを研究してきた「函館産業遺産研究会」の会長、富岡由夫さん(77)。99年から函館要塞を調査している。「勤務していた人たちが高齢なので、早く聞き取り調査をしなくては」と今までに約60人の話を集めた。

実地調査の方は、遺跡の所在がよく分からず、なかなか軌道に乗らなかつた。だが、00年に防衛庁防衛研究所戦史部の協力を得られるようになり状況が一変。同研究所の資料など使って捜索、測量することで大きく進展した。

とはいえ、春から夏にかけては木々の枝葉や草が生い茂って接近できない。調査は秋や初春に限られ、山の上での調査は体への負担も大きい。

生い茂った木の根にむしばまれ、ボロボロの状態という要塞だが、富岡さんの夢は大きい。「幕末の開港5港で、街並みが生き残っているのは函館だけ」。要塞と函館山を含めた街全体をユネスコの世界遺産に登録するのが目標だ。「そのためにも、自然保護とのバランスを取りながら、要塞をしっかりと整備してほしい」と訴えている。

まちづくりと遺産

「近くて遠い」を身近に

年間530万人が訪れる観光都市・函館にとって、函館山は貴重な。市民の関心も高い。70年に周遊道路の建設計画が持ち上がった際には市民による反対運動が起き、同市は75年に計画を撤回する一方で逆に「函館山緑地整備計画」をスタートさせた。計画は10年、5年ごとに更新している。

整備計画で、函館山を(1)人間の手を加えず、盗掘防止を図る自然保全区域(2)ハイキングやバードウォッチングの舞台となり、子供たちや町内会が利用しやすいよう散策路等を整備してきた市民の利用区域(3)展望台付近の渋滞を緩和するため、客を降ろした観光バスをふもとで待機させるなどの改善をした観光施設区域、に3区分し整備してきた。

今年度から5年間の新整備計画で同市は、函館要塞のうち5カ所を、見学など市民の利用が可能ないように整備する。また、同市は8月25日に小中学生を対象とした初めての要塞跡見学会を開き、近くて遠い存在だった函館要塞を身近な施設にしようとしている。